

Title	日吉キャンパス出土の学食食器
Sub Title	A collection of tableware used in the student cafeterias excavated at Hiyoshi campus
Author	岩浪, 雛子(Iwanami, Hinako)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2025
Jtitle	近代日本研究 (Journal of modern Japanese studies). Vol.41, (2024.) ,p.305- 334
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資史料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20240000-0305

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日吉キャンパス出土の学食食器

岩 浪 雛 子

はじめに

慶應義塾では、建物の建て替え等の工事に合わせ、土地に埋もれている文化財（埋蔵文化財）の発掘調査を行ってきた。その成果は発掘調査報告書にまとめられ、展示や研究に活用されてきている。一方、調査では、得られた全ての成果が報告されてきたわけではなく、そもそも調査対象から漏れた過去の痕跡も少なからず存在する。⁽¹⁾ そのひとつが、慶應義塾の諸活動に関わる痕跡である。本稿では、日吉キャンパスの発掘調査において調査対象とはされなかったが、偶然採集されていた学食食器を取り上げる。これらは日吉キャンパスの食堂で使用されたものと推定され、慶應義塾の歴史の一端を物語る資料である。加えて、近現代の国内で生産・消

費された食器を考える上でも重要な資料になると考えている。しかしながら、当資料群は未報告資料であり、これまでほとんど目を向けられてこなかった。そこで、本稿ではこれら学食食器資料群の紹介も兼ねて、考古学的情報と学内外の資料をもとに食器の製造元、使用した食堂、年代観について考察を試みる。

一 問題の所在——学食食器研究と日吉キャンパスの食堂史

(1) 学食食器をめぐる研究

慶應義塾の食堂史は、慶應義塾の歴史をたどる書籍や広報誌等にまとめられている。⁽²⁾ ところで使用されていた道具類に関する言及は限られており、学食食器についての情報も見当たらない。他方、全国の大学に目を向けると、近現代の埋蔵文化財への関心が高まると共に、考古学資料に基づく大学史に進展がみられるようになってきている。⁽³⁾ 学内で使用されていた食器についても出土報告が増えてきており、研究や展示に活用されている。とりわけ、大学病院食器に関する研究は、大学間の比較も取り組まれており、全国の大学から出土する病院食器類が同じ製造元であること、大学ごとに独自の銘を持つ一方で、形態や意匠は共通点が多く、規格生産品であることが指摘されている。⁽⁴⁾

(2) 日吉キャンパスの食堂について

日吉キャンパスは、大正期における慶應義塾の学生数の激増によって三田キャンパスの施設が狭隘化したことを背景に、現在の神奈川県横浜市港北区日吉に昭和九年（一九三四）に開校した。アジア太平洋戦争末期の

昭和一九年（一九四四）には、文部省の指示のもと、キャンパスの一部を海軍に貸与し、昭和二〇年（一九四五）には空襲による大きな被害を受ける。戦後の昭和二〇年（一九四五）九月には、旧海軍の軍事施設差し押さえを名目にキャンパス内の校舎や寄宿舎が米軍に接収され、四年後の昭和二四年（一九四九）一〇月一日に接収が解除された。解除後は、主に大学の教養課程（総合教育課程）を学ぶキャンパスとして、多くの学生が通う活気ある場へと戻っていく。なお、返還と同時に、慶應義塾高等学校も移転してきた。

日吉キャンパスにおける食堂の歴史は、キャンパスが開設された昭和九年（一九三四）に慶應義塾の消費組合経営による食堂からはじまる。昭和九年（一九三四）一〇月、現在の高校グラウンド脇に通称「赤屋根食堂」が開店した。この建物は米軍接収中に一度焼失したが、返還後に高校の食堂として再建され、昭和三十一年（一九五六）まで営業した。戦前のキャンパスには、第一校舎の裏手南側に建っていた第一学生控室・第二学生控室にも食堂・教職員食堂があった。⁽⁵⁾

戦後の日吉キャンパスには赤屋根食堂の他に、グリーンハウス、二幸食堂、梅寿司、生協食堂等が営業した。⁽⁶⁾ グリーンハウスは昭和二五年（一九五〇）から現在も営業が続く食堂である。⁽⁷⁾ その前身は、田沼文蔵氏が登戸仮校舎の学生寮食堂として、昭和二二年（一九四七）四月に開店した食堂である。戦中のキャンパスの被災や米軍接収の影響で、戦後直後の慶應義塾は首都圏近郊に複数の仮校舎を設けており、川崎市の陸軍第九技術研究所跡（現 明治大学生田キャンパス）に設けられた登戸仮校舎では、医学部予科と文科系予科の一年生が学んだ。⁽⁸⁾ 登戸仮校舎の食堂は、日吉返還後の昭和二五年（一九五〇）一月に、大学生・高校生向けの食堂としてキャンパス内の旧海軍兵舎跡へ移転する。⁽⁹⁾ この兵舎は、第二校舎の東側、現在日吉記念館が建つ付近にあった。

昭和二十九年（一九五四）三月になると、慶應義塾の学生・生徒を対象にした公募により、食堂名がグリーンハウスと決定する。⁽¹⁰⁾ 食堂名が決定して間もなく、義塾創立百周年を記念して日吉記念館建設が計画されると、当該地にあった食堂は立ち退きを余儀なくされる。それによって、食堂は一時閉店となるが、代替地の提供を慶應義塾から受け、閉店した翌年には営業が再開する。⁽¹¹⁾ 移転地については、食堂側の記録と慶應義塾側の記録に若干の違いがあるが、少なくとも昭和四八年（一九七三）には現在の場所に高校食堂が建設された。⁽¹²⁾ グリーンハウスは、昭和四五年（一九七〇）に新たに建設された第六校舎の地下にも食堂（現グリーンズテラス）をオープンする。その後も、キャンパス内の複数の場所で喫茶施設等を営業した。⁽¹³⁾ 高校食堂と第六校舎の食堂は、どちらも現在まで営業が続く。

日吉キャンパスには学生食堂としては珍しい、寿司屋「梅寿司」もあった。梅寿司の店主飯田信治氏は、昭和二六年（一九五一）に合資会社田町屋商店を設立、契約書面においても昭和三六年（一九六一）以降は田町屋商店と慶應義塾で契約が交わされている。梅寿司は元々、大田区の武蔵新田にあった店で、大正末頃に近隣にグラウンドや合宿所がおかれた慶應義塾体育会野球部の関係者が出入りした店だった。昭和一六年（一九四一）に野球部のグラウンドが、昭和一七年（一九四二）に合宿所が日吉へ移転してくる。野球部の拠点が日吉へ移転したことを契機に、梅寿司も日吉へ移転してきた。⁽¹⁵⁾

キャンパスへ移転した詳しい時期が明記された資料は見つからなかったが、慶應義塾保管の契約関係書類では、昭和二十九年（一九五四）二月二五日作製の店舗の設計図が、キャンパスにおける梅寿司の存在を示す最も古い資料である。先行研究における「平成二年まで約四十年商売をしていた」という言及からは、設計図の作製時期とそう離れない時期に開店したとも考えられる。食堂は、昭和三九年（一九六四）の時点では現在の来

往舎付近にあった。⁽¹⁷⁾昭和四九年（一九七四）十月に食堂棟が建つと、二階の一角に梅寿司は移転する。

完成当初の食堂棟では、一階全面で二幸食堂の学生向け食堂が営業し、二階には梅寿司の他、二幸食堂の教職員食堂、慶應義塾生活協同組合経営による食堂があった。梅寿司は、平成二年（一九九〇）まで営業を続け、閉店直後には、梅寿司があった場所にグリーンハウスの食堂が開店する。平成一七年（二〇〇五）の食堂棟全面リニューアルによって、二幸食堂は閉店、二階全体がグリーンハウス、一階全体が慶應義塾生活協同組合による食堂となり、現在に至る。

これら日吉キャンパスの食堂は、いずれも慶應義塾が契約を交わした一般業者や生活協同組合によって運営された食堂であり、慶應義塾直営の食堂ではない。

二 考古学的情報の整理

（１）出土概要

本稿で取り上げる学食食器は全て日吉キャンパス北部、日吉台遺跡群A地区独立館地点で出土した。この発掘調査は、慶應義塾創立一五〇年事業の一環として計画された第四校舎独立館建設に伴うもので、食器類は現在の桜並木アプローチと独立館の境界付近から出土した。調査当時は新研究室棟と綱島街道の間に位置し、建物裏の人通りの少ない場所だった。当調査においては基本的に近世以前を対象としており、近現代は米軍接収期の建物址の調査にとどまる。⁽¹⁸⁾しかし、調査担当者の一入、安藤広道氏によれば、遺構確認時に慶應義塾関係の多数の遺構が発見されていたとのことで、それらから出土した遺物の一部が採集されている。学食食器はそ

のなかに含まれていた。これらの資料群の存在は報告書で一切触れられていないため、当時の発掘関係者以外が知り得る機会はなかったが、令和五年（二〇二三）春に慶應義塾ミュージアム・コモンズにて行われた展覧会『構築される「遺跡」』において展示され、日の目を見るに至った。⁽¹⁹⁾ただ、発掘調査時にこれらの資料の出土状況等についての記録はとられておらず、考古学的なコンテクストは残念ながら不明である。そのため、詳しい廃棄の時期やその理由等を出土状況から探ることは難しい。

（2）観察所見

食器素材は磁器あるいはメラミン樹脂素材であり、碗、碗蓋、皿に分類できる（図1・2、表1）。

No. 1～No. 9は共通して磁器で機械口クロ成形成、量付無釉、No. 4を除いて全て器壁が四ミリ前後の厚手の食器であることも共通する。No. 1はいわゆるどんぶり碗⁽²⁰⁾で、口縁部に緑色（酸化クロム、以下略）の二重圏線が引かれ、胴部に紺でペンマークが描かれる。No. 2は口縁部に緑の二重圏線が引かれた端反碗で、大きさや形状から湯呑に使用したと考えられる。No. 3は、No. 1と同形のどんぶり碗で、口縁部に緑の二重圏線が引かれ、高台内に青色（酸化コバルト、以下略）で「梅鯨」と縦書きで記されている。No. 4は口径八センチほどの小皿で、見込に銅板転写（青）で「梅鯨」銘と銀杏の葉が描かれる。No. 5は碗蓋で、おそろくNo. 1やNo. 3のような形状の碗とセットになるものと考えられる。胴部に銅板転写（青）を用いてペンマークと“Green house”が組み合わさったマークが描かれる。No. 6は円形の洋皿で、口縁部は吹絵で紫色に彩色されており、口縁上部に銅板転写（紫）でNo. 5と同じペンマークと“Green house”が組み合わさったマークが描かれる。No. 5とは、マークの文字の間隔等に細かな違いがあり、使用された転写地は異なる。高台内中央には菱形の枠に“MINO”（緑）と

描かれた裏印が押される。No. 7は楕円形（オーバル形）の深さのある洋皿で、口縁部と見込に金色の圈線が引かれる。中央上部には金色で円と“GREEN HOUSE”が組み合わさった意匠が装飾される。高台内中央にはNo. 6と同じ“MINO”印とその下部に“37.5.”が印字される。高台には焼成時の焼き歪み防止のために長手方向に隆線が一本作出されている。No. 8・No. 9は共に端反形の湯呑用とされる碗で、No. 2と同形である。胴部や上寄りに青でNo. 7と同じ“GREEN HOUSE”マークが装飾される。No. 8は裏印にNo. 6・No. 7と同じ“MINO”印が押され、No. 9はその印の下部に“37.5.”が印字される。

No. 10はメラミン樹脂製の皿で、内面口縁部に慶應の三色旗をイメージした青（紺）と赤の帯状の装飾が見られる。高台内には“SF-71”・“YAMATO PLASTICS / Three line / MELAMINE WARE / JAPAN”とエンボス加工されており、その下部に旧JISマークがある。高台部には三箇所の凹みがある。

三 食器の生産・消費に関する検討

（一）食器の製造元

No. 6（No. 9は菱形枠に“MINO”マークの裏印から、美濃窯業株式会社（後の美濃窯業製陶株式会社）の製品と判断できる。⁽²¹⁾）美濃窯業株式会社は、大正七年（一九一八）に現在の岐阜県瑞浪市で開業し、開業翌年には製陶部を設置して陶磁器生産を開始する。大正九年（一九二〇）に片倉製糸紡績から従業員宿舎用として使用する食器を受注したことを契機に、「集団給食用食器」⁽²²⁾メーカーとして製品の販路を広げていった。「集団給食用食器」とは工場や病院、学校、企業等の食堂で使われる食器のことで、「商品一個ごとに社名、社章などの

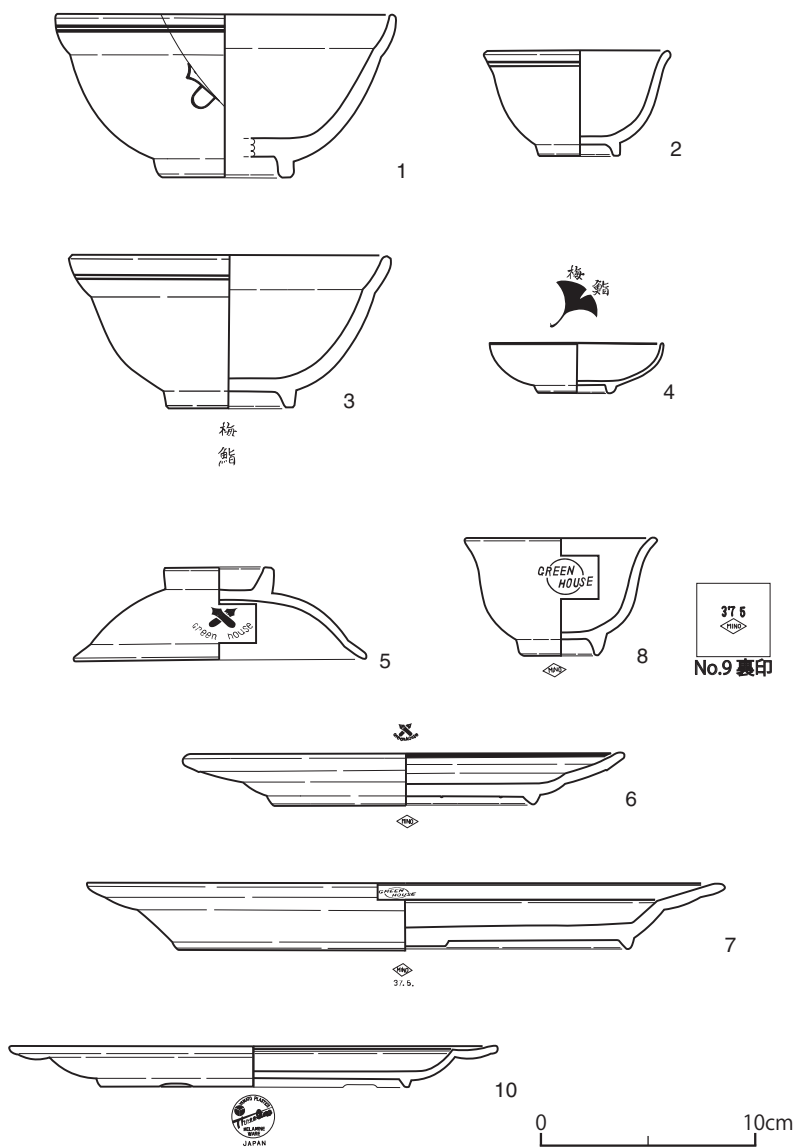


図1 日吉台遺跡群A地区独立館地点出土学食器 実測図

日吉キャンパス出土の学食食器

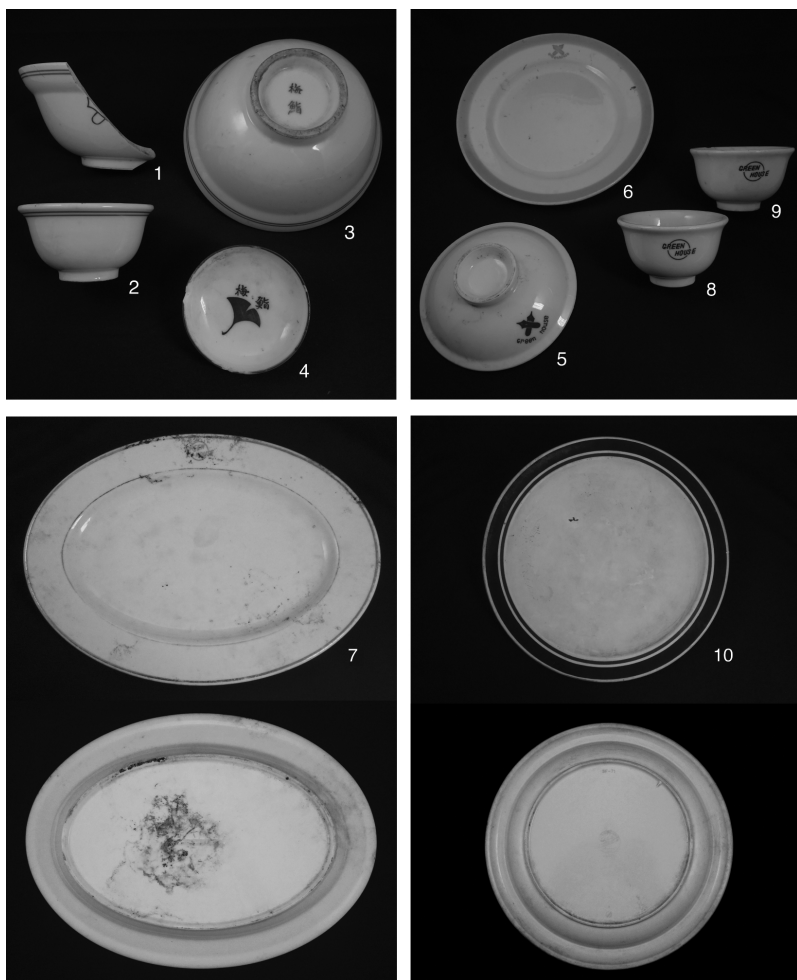


図2 日吉台遺跡群 A 地区独立館地点出土学食食器 写真

残存	施釉	製造元	備考	使用店舗
1/4	畳付無釉	不明		グリーンハウス？
概ね完形	畳付無釉	不明		不明
完形	畳付無釉	不明		梅寿司
概ね完形	畳付無釉	不明		梅寿司
概ね完形	畳付無釉	不明	摘み径 50mm	グリーンハウス
完形	畳付無釉	美濃窯業株式会社	焼き歪み	グリーンハウス
完形	畳付無釉	美濃窯業株式会社	焼き歪み、 底部に焼き歪み防止の凸線 (36mm)	グリーンハウス
完形	畳付無釉	美濃窯業株式会社		グリーンハウス
完形	畳付無釉	美濃窯業株式会社		グリーンハウス
完形	—	ヤマト化工 株式会社	高台部 3箇所凹み	不明

マークが入れられ、いわゆる特注品」であり、大口の受注が基本であった。⁽²³⁾ 器壁が厚く、素材的にも高強度な器で、口縁部に緑の二重圈線が引かれたデザインが特徴である。当初は紡績関係からの大量発注が続いたが、大正末頃からは大学や国立の病院食器、軍関係への納入も増え、昭和一〇年（一九三五）代には、軍需工場やその宿舎の拡大に伴い「集団給食用食器」の需要が更に増える。しかし、昭和一八年（一九四三）一〇月には非軍事産業である陶磁器用の生産物資割り当て配給制は厳しくなり、陶磁器製造は休止となった。終戦直後には平和産業として製陶部の整備を開始、昭和二〇年（一九四五）の終わりには「集団給

表 1 日吉台遺跡群 A 地区独立館地点出土学食食器 観察表

No.	種別	材質	口径・底径・器高 (mm)	重量 (g)	成形技法	装飾技法	装飾・文字情報（色）
1	碗	磁器	(146)・(60)・71	1249	機械ロクロ	手描き・ ゴム印判	外：〈下絵〉口縁二重圏線（緑）・ 胴部ベンマーク（紺）
2	碗	磁器	88・36・49	111.1	機械ロクロ	手描き	外：〈下絵〉口縁二重圏線（緑）
3	碗	磁器	154・59・73	453.8	機械ロクロ	手描き・ 銅版転写？	外：〈下絵〉口縁二重圏線（緑）・ 高台部“梅鮎”（青）
4	皿	磁器	80・33・23	48.0	機械ロクロ	手描き・ 銅版転写	内：〈下絵〉口縁部着色（青）・ 銀杏の葉と“梅鮎”（青）
5	蓋	磁器	136・－・43	1844	機械ロクロ	銅版転写	外：〈下絵〉ベンマークと“Green house”（青）
6	皿	磁器	206・120・25	376.0	機械ロクロ	銅版転写・ 吹絵	外：〈下絵〉高台部菱形内に“MINO”（緑） 内：〈下絵〉口縁部帯状に着色（紫）・ ベンマークと“Green house”（紫）
7	皿	磁器	長径295 短径212・ 209・31	693.3	機械ロクロ	転写地？	外：〈下絵〉高台部菱形内に“MINO”とその 下部に“37.5.”（緑） 内：〈上絵〉口縁・見込に圏線（金）・ 丸に“GREEN HOUSE”（金）
8	碗	磁器	90・37・54	122.2	機械ロクロ	ゴム印判	外：〈下絵〉丸に“GREEN HOUSE”（青）・ 高台部“MINO”（緑）
9	碗	磁器	89・35・35	143.8	機械ロクロ	ゴム印判	外：〈下絵〉丸に“GREEN HOUSE”（青）・ 高台部“MINO 37 5”（緑）
10	皿	合成 樹脂	431・145・19	2344	機械	着色	内：口縁二重帯（赤・青） 外：高台内エンボス“SF-71”“YAMATO PLAS- TICS / Three line / MELAMINE WARE / JAPAN”旧 JIS マーク

（ ）…復元値

「食用食器」を早くも復活させる。翌年には進駐軍用食器を大量受注するが、国内向け製品にも注力し、昭和二年（一九五〇）頃には病院や学生食堂の受注も増えていく。昭和三年（一九六〇）、美濃窯業株式会社から製陶部門が分離独立し、「集団給食用食器」をはじめとする食器類の製造を主力とする美濃窯業製陶株式会社が設立される。

美濃窯業株式会社が使用した裏印には、菱形枠に“MINO”印の他、扇子の意匠を使った印がある。マーク自体はどちらも戦前の同社のカタログで確認できるが、製品の裏印としては、戦前の製品は扇印が主流であった。²⁴裏印に菱形印が使われる時期をめぐっては、「昭和二〇年（一

九四五）九月から昭和三五年（一九六〇）一〇月まで美濃窯業が生産した国内向け陶磁器の裏印として使われていた⁽²⁵⁾との指摘があり、菱形の裏印をもつ器は戦後の製品である可能性が高い。

大正八〜昭和四〇年（一九一九〜六五）頃の製品カタログからは、慶應義塾が昭和初期から中期にかけて美濃窯業株式会社・美濃窯業製陶株式会社に食器を発注していたことがわかる。主要な上納先として「慶應義塾大学」が登場するのは、昭和一三年（一九三八）の食堂食器カタログである。昭和三五年（一九六〇）の病院向けカタログには「慶應義塾大学医学部附属病院」が確認できる。製陶部門独立直後の昭和三六年（一九六一）と昭和四〇年（一九六五）頃の製品カタログにも引き続き「慶應大学」・「慶應義塾大学病院」とあり、両者とも取引が続いたことが確認できる。

No. 10は“YAMATO PLASTICS / Three line”⁽²⁷⁾という裏印があり、インターネットの検索からヤマト化工株式会社の製品と特定できた。ヤマト化工株式会社は昭和三六年（一九六一）に「集団給食用メラミン樹脂製食器」の製造に着手している。「スリーライン」という名称は昭和四〇年（一九六五）代の同社の硬質メラミン給食食器等を扱うカタログに確認でき、同誌にはNo. 10の裏印に似たロゴマークも載っている。なお、昭和四六年（一九七二）には販売・企画・開発部門が独立してスリーライン株式会社が発足する。この製造元の裏印の変遷については不明である。

（２）特徴的なデザインと素材

陶磁器産業が統制下におかれた昭和初期の国内生産陶磁器製品には、原産地を示す記号と生産者別表示記号が組み合わされたいわゆる「統制番号」を高台内に表示したものがある。この裏印は、概ね昭和一六〜二一年

(一九四一～四六) 頃に製造のものとされている⁽²⁸⁾。前出の美濃窯業も昭和一八年(一九四三)一〇月に裏印に製造元印を入れることが禁止され、統制番号「岐1065」を記すようになった⁽²⁹⁾。本稿で扱う食器類には統制番号が入った学食食器類はひとつもないため、この頃の生産と特定できるものはない。なお、No.7とNo.9の高台には、菱形枠に“MINO”マークの下部に“375”“375”のように数字が印字されている。この印の類例として、広島大学霞キャンパス出土「広大病院」銘皿に、菱形マークとその下部に“3020”が印字されたものがあげられるが、印については、「何を意味しているのか不明である」としつつ「統制番号のような数値」と言及される⁽³⁰⁾。一方で、No.7とNo.9は、昭和二九年(一九五四)以降に使用される「グリーンハウス」銘がある食器に同印が伴うことから、戦中の資料ではない。数値が何を意味するのは明らかではないが、共通して美濃窯業製品であることから製造ロットの意味合いがあるかもしれない。

No.1～No.3のような緑の圏線デザインの厚手食器は、美濃窯業製品に限らず、昭和一〇年(一九三五)頃の岐阜県の瑞浪・東濃地域や愛知県の瀬戸地域の多くのメーカーで製造された⁽³¹⁾。伝世品や各地で出土する同デザインの食器類にはNo.1～No.3・No.5・No.8・No.9と同じ器形のものがみられる。これらには統制番号が伴うものも多く、このようなデザインの食器を指す言葉と考えられる「国民食器」という呼称も昭和一八年(一九四三)頃には確認できる⁽³²⁾。このデザインを持つ器の詳しい初現期は分かっておらず、生産期間を検討した沼崎陽氏によれば、少なくとも美濃窯業で初めて集団用食器を受注した大正九年(一九二〇)からアジア太平洋戦争を通じて、「戦後の一時期まで」生産された⁽³⁴⁾。同氏は、下限年代について「集団給食用食器」としてメラミン食器が普及すると「二本線の陶磁器は消滅」したと推測しており、こうした食器類の転換が「昭和三九年(一九六四)以降、使用者側で漸次行われた」可能性を指摘する⁽³⁵⁾。

素材という観点では、食堂で使われる食器類が陶磁器製からメラミン樹脂製に変化する時期を捉えることは重要である。メラミン樹脂製の食器は、大学に限らず全国の食堂で一般に広く普及しているが、元々はスイスのCIBA社が一九三八年に基本特許を取得した製造技術であり、国内では昭和三〇年（一九五五）代頃にCIBA社の一連の特許が切れると共に、様々な製品に使用されるようになる。⁽³⁶⁾ No. 10の製造元であるヤマト化工株式会社によれば、日本国内では昭和三〇年（一九五五）頃からこの素材が食器に使用され始め、昭和四〇年（一九六五）代に絵付技術の確立と共に集団用食器として急速に需要が拡大したものである。⁽³⁷⁾ 美濃窯業製陶株式会社も昭和三七～四一年（一九六二～六六）頃には自社では製造できない化学食器や外注仕入れの陶磁器が増加、他にも銀器やガラス等の多品種化が進む。⁽³⁸⁾ 「化学食器」はメラミン樹脂等の合成樹脂を使った食器を指すと推定される。これらの情報から、昭和三〇年（一九五五）代後半から昭和四〇年（一九六五）代前半頃が食堂食器の素材の転換期と捉えられる。

（3）食器を使用した食堂

No. 3・No. 4は、食器に記された文字によって梅寿司で使用されていた食器と特定できる。梅寿司の食器に関する資料は見当たらないが、慶應義塾保管の契約関係書類からは、昭和四六年（一九七一）には「寿司、ちらし、鉄火巻、鉄火丼、天井」等が提供されていたことがわかる。梅寿司の鉄火丼は、筆者が学食食器を調査する過程でも複数の卒業生が記憶していることを確認しており、昭和四八年（一九七三）卒業の宮本隆治氏による回想もある。⁽³⁹⁾ 営業期間を通じてメニューの改変が無かったのであれば、No. 3のどんぶり碗は鉄火丼や天井といった丼物用だったと考えていい。No. 4はその形状・大きさから醤油皿や薬味入れに使われたことが想定され

る。なお、No. 3の店名は底部にあるため、使用時には目に入ることがない。この銘の位置は、他の食堂食器と混同しないようにあるもの、あるいは寿司屋特有の器の返却を伴う出前販売との関係がうかがえる。

No. 5・No. 9は食器に記された文字によってグリーンハウスで使用された食器とわかる。日吉移転から間もない頃の食堂を写したと推測されるモノクロ写真⁽⁴⁰⁾には、文様までは特定できないものの、No. 8・No. 9と同形の湯呑碗、No. 6と同形の洋皿が映り込んでいる。グリーンハウスの社史では、食器にも幾つかの言及がある。戦後間もない時期の登戸仮校舎の食堂では、旧陸軍が使っていたアルマイト製食器を使用した⁽⁴¹⁾。日吉へ食堂が移転した後は、「慶應マーク」を入れた陶器製の食器を使用しており、「記念と称して、持ち去られることもしばしばであった」ため、困っていたと回想されている⁽⁴²⁾。前後の内容から、慶應マークの食器が使用されていたのは、日吉に移転した昭和二五・三〇年（一九五〇・五五）代頃と推定される。社史では、食堂で購入した食事を屋上でとる者もあり、食堂外で食器が置かれたままになることもあったため、後始末に苦労したことも触れられている⁽⁴³⁾。「慶應マーク」に対する詳しい説明はないが、一般的な慶應のマークといえはペンマークである。つまり、No. 1のようなペンマーク入りの食器がこれに該当する可能性がある。

また、食器にみられるグリーンハウスのロゴにはNo. 5・No. 6のようにペンマークと組み合わさったロゴと、No. 7・No. 9に使われた円形のロゴの二種類ある。後者は昭和四六年（一九七二）に採用されたロゴであるが、昭和四二年（一九六七）頃の会社案内や昭和四三年（一九六八）に創刊した社内報にも同様のロゴが使用されており、正式ロゴとして採用される以前から社内では使用されていたようである⁽⁴⁵⁾。

メニューについては、社史にて昭和二六年（一九五一）の主なメニューに「かつ、コロッケ、ハムサラダ、サラダ、ハンバーグ、ハムエッグ、カレー、ライス、ラーメン」、喫茶メニューとして「コーヒー、牛乳、

ショートケーキ、ドーナツ、おしるこ、氷水」を提供していたと記される。⁽⁴⁶⁾ 慶應義塾保管の契約関係書類にみられる昭和四六年（一九七二）のメニューでは、「Aランチ、Bランチ、スペシャルランチ」といった内容が不明なものから、「カレーライス、ラーメン、ハンバーグライス、カツ丼」等多種多様なメニューが提供されていたことがわかる。仮にNo. 1がグリーンハウスの食器であれば、カツ丼等の丼物あるいはラーメンに使われたと考えられる。No. 5はNo. 1のような形状のどんぶり碗に伴う蓋である。No. 6の洋皿には、先述の写真で同形の皿にライスやおかずが盛られていることから、多様なメニューで活躍したと考えられる。No. 7はNo. 6に比べるとやや大ぶりであり、メニューからはハンバーグライスやカレーライス等が想定される。⁽⁴⁷⁾

No. 10は食堂こそ特定できないものの、使用の様子がうかがえる写真がある。『塾』二九三号の慶應義塾学食特集にて「一九八六年頃の日吉キャンパス」という解説と共に、食堂棟と思われる場所で学生が食事する姿の写真が載っている。モノクロ写真のため確証は得られないものの、この写真にはNo. 10と同形同文様とみられる皿にご飯が盛られている様子が写る。⁽⁴⁸⁾

ところで、慶應義塾保管の契約資料には、食器に関わる記録が一切確認できなかった。梅寿司、グリーンハウスは、いずれも契約書に食堂を営業する施設および営業に必要な什器、備品等を慶應義塾から貸与するとあり、貸与した什器や備品のリストが付属するが、これらリストに食器は全く見当たらない。つまり、食器類は食堂業者自らが調達していたものであり、先述の美濃窯業のカタログに記載された「慶應義塾大学」には、こうした食堂業者が発注したものも含まれている可能性がある。なお、これまでに慶應義塾が直接経営した食堂は、三田キャンパスの西校舎にて昭和三七～平成三年（一九六二～九一）に営業した一軒のみであり、⁽⁴⁹⁾ 製品カタログで名前が確認できる時期と必ずしも整合しない。

(4) 他のキャンパス・大学の事例

慶應義塾では信濃町キャンパスの調査においても一括廃棄された食器類が出土している⁽⁵⁰⁾。これらは昭和七一九年（一九三二～四四）にかけて慶應義塾大学医学部の食養研究所で使用されていた食器と推察されている。関係者の回想録には、戦局が厳しくなると、将来に備えて食器類を中庭に埋めたという証言があり⁽⁵¹⁾、出土品もこれに関わるものと考えられる。出土食器には緑の二重圏線デザインで器壁が厚い食器が多量に含まれており、どんぶり碗や碗蓋、湯吞碗、洋皿等の器形は日吉出土食器と類似するが、その多くには統制番号が印字されている。慶應義塾や特定の学食店舗を表すマークや銘が入ったものがみられない点も注目される。

東京大学では三鷹国際学生宿舎を建設する際の調査から、食堂食器が一括で取り上げられている⁽⁵²⁾。同地点には、昭和三〇年（一九五五）頃に、東京大学の学生寮と食堂施設が建設されており、出土した食器類はこの食堂に関わるものと推定される。食器にはNo. 1・No. 3と同形で緑の二重圏線デザインのどんぶり碗も複数含まれる。これらには、昭和二十一年（一九四六）に設立する東京帝国大学協同組合のマークが描かれており、菱形枠に“MINO”マークの裏印が押されたものもあることから、戦後の発注品と考えられる。加えて、同地点出土の遺物には、磁器製どんぶり碗と同形のメラミン樹脂製どんぶり碗の破片もある。異素材同形碗の時期差については出土コンテキストも踏まえた検討が必要だが、ひとつの食堂において異なる素材の同形どんぶり碗が使用されていたことは集団食器の生産・消費を考える上で興味深い。

四 考察

(1) 生産年代の検討

No. 1は、製造元は不明、使用した食堂について確証は得られないものの、グリーンハウスの可能性がある。本資料は底部がわずかにしか残存していないため、厳密には統制番号含め裏印の有無は不明である。このことも踏まえ、緑の二重圏線デザインを生産期間とキャンパスの開校年から昭和九〇年（一九三四～六五）頃の生産と推定、仮にグリーンハウスの食器であるとすれば、昭和二五～四〇年（一九五〇～六五）頃に時期を絞ることができる。

No. 2は、裏印がなく、製造元、使用した食堂いずれも不明である。緑の二重圏線デザインの生産期間とキャンパスの開校年から昭和九〇年（一九三四～六五）頃の生産と推定される。

No. 3は、製造元は不明、梅寿司で使用された食器である。日吉キャンパスにおける梅寿司の開業期間は日吉接収解除後から平成二年（一九九〇）と推定されるが、銘の位置からは出前用の食器の可能性もあるため、食器自体は武蔵新田に店を構えた時代からの使用も想定できる。緑の二重圏線デザインの生産期間も考慮すると、大正期～昭和四〇年（一九一二～六五）頃の生産と推定される。

No. 4は、製造元は不明、梅寿司で使用された食器である。デザイン含め、生産年代の決定打となる情報がなく、No. 3同様に武蔵新田時代からの使用も想定される。梅寿司の武蔵新田における営業開始期は不明であるが、概ね大正期（一九一二）以降の生産と考えてよいだろう。

No. 5は、製造元は不明、グリーンハウスで使用された食器である。器形としては戦前から生産されたどんぶり碗蓋の形状であるが、圏線デザインは配されていない。「グリーンハウス」の名称が昭和二年（一九五四）三月に決定されたものであるため、生産時期もそれ以降で間違いないだろう。昭和四〇年（一九六五）代前半にはグリーンハウス独自で設定した円形のロゴマークの使用が社内資料で目立つことから、No. 5のようにペンマークを組み合わせたデザインはそれ以前の生産である可能性が高い。以上から、昭和二年三月～四〇年（一九五四～六五）頃の生産と推定される。

No. 6は美濃窯業株式会社あるいは美濃窯業製陶株式会社の製造、グリーンハウスの食堂で使用された食器である。No. 5と同様にグリーンハウスの名称決定時期、ロゴマークの変遷から見て、昭和二年三月～四〇年（一九五四～六五）頃の生産と推定される。

No. 7・No. 8・No. 9は美濃窯業株式会社あるいは美濃窯業製陶株式会社の製造、グリーンハウスで使用された食器である。昭和四〇年（一九六五）代前半頃から社内資料で Usage が目立つ円形ロゴマークがあることから、この頃の生産と推定される。ただし、メラミン樹脂製食器への転換期を考慮すると、生産時期は昭和三〇年（一九五五）代まで遡る可能性がある。

No. 10は製造元がヤマト化工株式会社、使用した食堂は不明である。三色旗の色を彷彿とさせるデザインからは慶應専用の食器として注文生産したものとわかる。素材の転換期と製造元の「集団給食用メラミン樹脂製食器」の製造の開始時期から早くとも昭和三十六年（一九六一）の生産と推定される。

(2) 廃棄に関わる検討

本稿で扱う資料群は出土コンテクストが失われており、一括で取り上げられているため廃棄年代の推定が難しい。ただし、前項までに検討した結果、多くの資料が戦後の所産であり、戦前生産の可能性がある梅寿司の食器についても、キャンパス内に移転してきた時期が戦後と考えられることから大半の食器は戦後の廃棄と推定される。戦後の出土地点の土地利用を振り返ると、どの時期もキャンパスの周縁部かつ建物の裏手にあたる人通りの少ない場所であった。さらには、どの食堂とも離れた場所であり、廃棄の経緯を食堂と出土地点の位置関係から推測することは難しい。

(3) 日吉キャンパス出土資料からみる学食食器デザインの変化時期

グリーンハウスと特定できる食器は、No.1のペンマークどんぶり碗も含めれば、緑の二重圏線デザイン↓ペンマークにグリーンハウスのロゴ↓円形グリーンハウスのロゴ、の順で生産されたと推定される。グリーンハウスの名称が装飾された食器類は、器厚や器形はそれ以前からあるいわゆる「集団給食用食器」の特徴を有しているものの、緑の圏線デザインは採用されていない。英語の意匠が取り入れられ、⁽⁵³⁾彩色も豊かである。先行研究では、デザイン変化の契機に食器に使われる素材の変化があると指摘されているが、当食堂の食器類からは素材変化より先にデザインの变化があつたとうかがえる。グリーンハウスについては、名称の採用時期が昭和二十九年（一九五四）三月と明確にわかっており、デザインの变化期の上限としてもこの時期を捉えられる。この事例が食堂食器全体の動向と評価するには早計であるが、少なくとも慶應義塾においては昭和二十九年（一九五

四)以降に素材や器形は従来のまま、食堂食器のデザインが変化したといえそうである。

また、菱形枠に“MINO”マークの裏印については、日吉キャンパス出土資料においてはいずれもグリーンハウスの食器であることから、戦後に使われるようになるという従来の見解と一致する。

五 まとめと課題

本稿では日吉キャンパスから出土したかつての学食食器に注目し、慶應義塾史、そして陶磁器生産史の観点から情報の整理を試みた。これらの資料は、キャンパスが開設される昭和九年(一九三四)以降、とりわけ戦後から昭和四〇年(一九六五)代に生産・使用されていた食器である可能性が高く、食堂業者が食堂用食器のメーカーに慶應独自のデザインをあしらった食器を発注していた様子も明らかとなった。独自のデザインを採用する一方で、形態や意匠に他の集団用食器と共通点が多く見られることから、規格生産品が含まれていることも示唆された。また、グリーンハウス食器からは、緑の圏線デザイン食器からメラミン樹脂製食器への移行期には、従来の器形に、文様のみ変更した器の生産があったと明らかにしたことはひとつの成果になったと考えている。

一方、課題を三点挙げておきたい。一点目は廃棄の経緯をどのように明らかにするかである。本稿では、出土学食食器の大半が戦後の廃棄であることは明らかにしたが、詳しい廃棄の年代も含めて、その経緯は不明のままである。廃棄を考える上では、食器類が同時に廃棄されたものか、個別のタイミングで廃棄されたものか、どうかも考慮する必要がある。また、出土地点に直接廃棄されたのか、他の場所で廃棄されたものが何らかの

経緯で移動してきたのかという点も検討しなければならない。食堂をめぐる史料は塾内外を問わずまだ存在している。さらなる聞き取り調査や写真資料との照合を進めることで、進展が期待される。二点目に、日吉キャンパスの食堂史について、位置関係や提供メニュー、客層などより詳しく明らかにしていく必要がある。キャンパス内の食堂の位置の変遷については、第一節第二項にて可能な範囲での情報整理を行ったが、慶應義塾関係者の回想に拠るところも大きく、不明な点も多い。日吉キャンパスの食堂の歩みを知るためには、一点目に挙げた課題と同様に、さらなる情報収集が求められる。三点目は、製造元への調査である。たとえば、美濃窯業製陶株式会社社史には歴代の製品カタログの一部が掲載されているが、全体を把握するためには実物の閲覧は欠かせない。また、第三節第三項にて食器類の手配は基本的に食堂側が行っていたことを指摘したが、製品カタログには大学名が記されており、大学の関与の度合いも明らかにしていく必要がある。

おわりに

筆者はこの学食食器の調査をきっかけに、幾人かの卒業生から学食に関する様々な話を聞くこととなった。時には、これらの食器を見てもらい、見覚えがあるかどうかを伺う機会を得たが、食器に見覚えがある方はいなかった。学食で使用している食器は記憶に残りにくいものなのかもしれない。翻って自身のこととして考えてみると、現在の学生食堂で使用されている食器を深く記憶できている自信がない。聞き取り調査から食器の具体的な時期を検討する上での難しさが垣間見える出来事だった。一方で、この食器を起点として、当時の学食の雰囲気について、様々な思い出話を聞くことができた。食器そのものを記憶していなくとも、実際に使わ

れていた食器（モノ）に触れることで、さまざまな記憶が想起されるのかもしれない。モノを起点とする歴史研究の意味の一端を考える貴重な機会となった。

キャンパスの足元には慶應義塾の歩みが層を成して残っている。本稿が、今後の慶應義塾構内の発掘調査と塾史研究とをより深く結びつけるきっかけとなれば幸いである。

〔付記〕

本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJS2123 および二〇二四年度潮田記念基金による博士課程学生研究支援プログラムの支援を受けたものです。また、本稿執筆にあたり、以下の方々に資料提供およびご指導・ご教示賜りました。ここに記して御礼申し上げます。（順不同、敬称略） 安藤広道 井畝良太 小林寛子 櫻井準也 繁森隆 榎木真 長佐古真也 中野高久 濱田直孝 堀内秀樹 渡辺丈彦 慶應義塾大学日吉運営サービス担当総務 東京大学埋蔵文化財調査室 新宿区文化観光産業部文化観光課

註

（１） 発掘調査では調査ごとに調査の対象を協議して決定しており、特に近現代（明治以降）の痕跡は調査対象にならないことも珍しくない。慶應義塾の発掘における対象の選択については慶應義塾ミュージアム・commons 展覧会『構築される「遺跡」』（安藤広道・本間友・長谷川紫穂・山田桂子編『カタログ 構築される「遺跡」：KcMCo 建設で発掘したもの・しなかったもの』慶應義塾大学ミュージアム・commons 二〇二三年）や同展示に関する論考、岩浪雛子・畑中乃咲佳・山口舞桜「問いかけ、対話する考古学展示：『構築される「遺跡』』展が目指したもの』『The

KeMCo Review』(11) 七七一―九三頁 二〇二四年で詳述している。

- (2) 慶応義塾大学経済学部白井研究会編『慶応義塾消費組合史』慶應通信 一九九〇年、慶応義塾史事典編集委員会編『慶応義塾史事典 慶応義塾一五〇年史資料集 別巻Ⅰ 慶応義塾 二〇〇八年、大澤輝嘉「学食の変遷」』慶應義塾歴史散歩 キャンパス編 一八九―一九三頁 二〇一七年、渡部淳編『ステンドグラス 慶應義塾の「学食」今昔』『塾』(二五四) 三八―三九頁 二〇〇七年、高野泰彦編『特集・義塾の学食 いま・むかし』『塾』(二九三) 二一七頁 二〇一七年
- (3) 石丸恵利子・大近美穂・西口祐子「広島大学霞キャンパス出土の「広大病院」食器」『広島大学埋蔵文化財調査研究紀要』(六) 七一一―九五頁 二〇一五年、田尻義了「九州帝國大學付属醫院跡出土の病院食器に関する考古学的研究」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集(下巻)』一〇二三―一〇三六頁 二〇一六年、笹川尚紀『京都大学総合博物館 二〇一九年度特別展 文化財発掘Ⅵ―幕末・近代の出土文字資料』京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター 二〇二〇年、北海道大学埋蔵文化財調査センター『北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター第40号』北海道大学埋蔵文化財調査センター 二〇二二年
- (4) 前掲註(3) 北海道大学埋蔵文化財調査センター 二〇二二・三頁
- (5) 慶應義塾 福澤研究センター編『慶応義塾年表・創立百二十五年』慶應義塾 一九八五年・八二―八三頁
- (6) 戦後の日吉の食堂については、繁森隆氏、濱田直孝氏、慶應義塾大学日吉運営サービス担当総務の方々にご協力あり、令和六年(二〇二四)八月に慶應義塾保管の契約関係書類を閲覧させていただいた。閲覧したのは、グリーンハウス、梅寿司、二幸食堂に関する概ね昭和三〇年(一九九五)から平成初期の書類である。
- (7) グリーンハウスに関する情報は慶應義塾保管の契約関係書類とグリーンハウス株式会社「人づくり味づくり三十年 グリーンハウス社史」グリーンハウス株式会社 一九七七年、株式会社グリーンハウス『GREEN HOUSE 40』株式会社グリーンハウス 一九八七年、グリーンハウス社長室広報担当『Wellness & Ambience グリーンハウス50周年

史』株式会社グリーンハウス 一九九七年を参考にした。

(8) 前掲註(2) 慶應義塾史事典編集委員会編 二〇〇八…一二二頁「仮校舎」

(9) 前掲註(7) 株式会社グリーンハウス 一九八七…二二頁

(10) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二二頁。名称が決定した年に田沼氏は有限会社グリーンハウスを設立、昭和三四年(一九五九)には株式会社となる。

(11) 当時のことは、昭和三〇年(一九五五)に立ち退き通達、翌年に代替地で再開(前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二四頁)という説と、昭和二九年(一九五四)に通達、翌年に再開(前掲註(7) 株式会社グリーンハウス 一九八七…二三頁、グリーンハウス社長室広報担当 一九九七…六三頁)という説がある。この頃の学校側の資料は確認できず、詳細な年代は不明である。

(12) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二四頁、グリーンハウス社長室広報担当 一九九七…八二頁では現在も同社が運営する高校食堂がおかれている地を提供されたとある。一方で、昭和三四年(一九五九)の日吉キャンパス地図(前掲註(2) 慶應義塾史事典編集委員会編 二〇〇八…八〇三頁)には同地に建物がなく、それとは別に赤屋根食堂があった場所に食堂が建つ。昭和三三年(一九五八)に「日吉の学生食堂六十六坪、第二校舎東側より赤屋根食堂南側に移改増築」(前掲註(5) 慶應義塾 福澤研究センター 一九八五…一五五頁)という記録もあり、年代に若干のズレがあるものの、元々のグリーンハウス食堂は第二校舎東側であることから、代替地は赤屋根食堂があった地である可能性も捨てきれない。昭和四八年(一九七三)には現在の場所に高校食堂が建設されていることは、前掲註(5) 慶應義塾 福澤研究センター 一九八五…二〇三頁のほか、慶應義塾保管の契約書からもうかがえる。

(13) 慶應義塾が保管する契約書類からは、昭和四九年(一九七四)に食堂棟が完成すると三階喫茶室や、昭和六〇年(一九八五)頃に藤山記念館ラウンジの喫茶コーナーを営業したことがうかがえる。一九六〇年代に、現在の来往舎

の位置に、二幸食堂とともにグリーンハウスがあったとの回想があり（黒岩純一「写真に見る戦後の義塾」56 一九六〇年代の日吉』『三田評論』二五二号 二〇二二年二月号）六五―六六頁 二〇二二年・六六頁）、キャンパス内には他にもグリーンハウスが運営する食堂が存在していた可能性がある。

(14) 横浜商工会議所編『横浜商工名鑑 昭和四〇年版』横浜商工会議所 一九六五年・一八三頁

(15) 前掲註(2) 大澤 二〇一七・一九三頁、高野編 二〇一七・五頁

(16) 前掲註(2) 大澤 二〇一七・一九三頁

(17) 伊藤行雄「写真に見る戦後の義塾」藤山記念日吉図書館』『三田評論』二二三号 二〇一八年六月号』四九―五〇頁 二〇一八年・五〇頁

(18) 慶應義塾大学文学部民族考古学研究室『日吉台遺跡群発掘調査報告書』二〇〇六―二〇一四年度の調査成果』慶應義塾大学文学部民族考古学研究室 二〇一九年

(19) 前掲註(1) 安藤ら編 二〇二三・一三頁

(20) No. 1・No. 3のような器形のいわゆる「どんぶり」は、碗と鉢のどちらに分類するか、新たな器種とするかの意見は分かれており、遺跡や研究者により異なる見解が示されているのが現状である。本稿では、当時のメニューや卒業生の証言等からこの形状の器は井物に使ったと推定され、手に持って使用し、口をつけて食事をする器であることから碗に分類し、文中ではより用途を明確にするために「どんぶり碗」という名称を用いる。

(21) 美濃窯業株式会社については主に、美濃窯業株式会社『美濃窯業株式会社 一九一八―二〇〇二 八三年の歩み』美濃窯業 二〇〇二年、美濃窯業製陶株式会社『美濃窯業製陶株式会社 一九一九―二〇〇二 杜史 八三年の歩み』美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六年を参考とした。

(22) 「集団給食用食器」という名称は、美濃窯業株式会社が使用した呼称である。ただし、美濃窯業製陶株式会社として独立する際に株主へ宛てた趣意書の中では「集団食器」と称し、昭和三六年（一九六二）頃からは「従来総称して

いた「集団給食用食器」も次第に巾が広くなってきたため」呼称を「業務用食器」に変更している（前掲註（21）美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六・三〇頁）。本稿においては生産された時期にかかわらず「集団給食用食器」の名称に統一する。

（23） 前掲註（21）美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六・八頁

（24） 美濃窯業が大正八年（一九一九）に生産した第一号製品の裏印には扇子印が押されている（前掲註（21）美濃窯業株式会社 二〇〇二・巻頭図版、美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六・巻頭図版）。発掘調査においても扇の裏印をもつ製品は戦前に帰属する出土事例が多い。近年の成果では、旧日本陸軍被覆本廠跡地出土の戦中の資料群（公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター 二〇二四『東京都埋蔵文化財センター調査報告81…道合遺跡赤羽上ノ台遺跡』公益財団法人東京都教育支援機構 東京都埋蔵文化財センター）や京都大学構内出土の戦前の食堂食器類（前掲註（3）笹川 二〇二〇・四頁）に扇の裏印をもつ緑の二重圏線デザインのある器がある。

（25） 沼崎陽「資料紹介 戦後の国内向け陶磁器の一例」『東京考古』（一九）一一六―一一八頁 二〇〇一年・一一六頁

（26） 製品カタログは社史の巻末に掲載されたものを参照した（前掲註（21）美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六・九六―一〇六頁）。ここには過去に配布されたカタログの一部が掲載されており、各カタログの中でも上納先や製品等の一部分のみが載っている。

（27） ヤマト化工株式会社の情報については、公式ホームページの「沿革・開発の歴史」<https://www.yamatokako.co.jp/company/history.html>（最終確認日：二〇二四年一〇月三日）を参照した。

（28） 萩谷茂行「博士論文 戦時下の陶磁器産業における製造、流通への考察 戦時統制と製品」京都造形大学博士論文 二〇一八年・七六―七八頁

（29） 前掲註（21）美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六・八一頁

（30） 前掲註（3）石丸ら 二〇一五・八四頁

- (31) 瑞浪市陶磁資料館編『番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』瑞浪市陶磁資料館 二〇一二年
- (32) 前掲註(31) 瑞浪市陶磁資料館編 二〇一二
- (33) 沼崎陽「資料紹介 在國在郷軍人會特製の湯呑について」『東京考古』(二八) 一六三―一六五頁 二〇〇〇年…一六五頁
- (34) 「筑波町分會」銘の同デザイン湯呑碗が明治四四年(一九一三)から大正二年(一九一四)の間に生産された可能性があることから、初現期は更に遡ることが想定される(前掲註(33) 沼崎 二〇〇〇…一六五頁)。
- (35) 前掲(25) 沼崎 二〇〇一…一八頁
- (36) 小枝幾久雄「メラミンおよびメラミン樹脂」『有機合成化学協会誌』二〇(三) 二九四―二九八頁 一九六二年、菊地弘重樹「ポリマーシリーズ ユリア樹脂・メラミン樹脂・フェノール樹脂」『高分子』二六(一〇) 七三一―三七頁 一九七七年
- (37) ヤマト化工株式会社の公式ホームページの「メラミン食器とは」(最終確認日…二〇二四年一〇月三二日) 参照。
- (38) 前掲註(21) 美濃窯業製陶株式会社 二〇〇六…四四頁
- (39) 宮本隆治「慶應義塾、一枚の写真⑥」『昭和四〇年代の日吉学食』『三田評論一〇八一号 二〇〇五年七月号』四九―五〇頁 二〇〇五年
- (40) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二二頁
- (41) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二一頁
- (42) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…一九頁
- (43) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…二二頁
- (44) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七…九七頁、グリーンハウス社長室広報担当 一九九七…五四頁
- (45) 前掲註(7) グリーンハウス社長室広報担当 一九九七…五八―五九頁

- (46) 前掲註(7) グリーンハウス株式会社 一九七七・一七頁
- (47) 学食食器類の使用痕の観察も簡易的に行ったが、メニューを特定できるような痕は確認できなかった。堆積状況や出土時から現在までの扱いも加味しつつ、より細かな痕跡を観察することで、使用痕から盛り付けたメニューの特定が可能かもしれない。
- (48) 前掲註(2) 高野編 二〇一七・二二頁
- (49) 前掲註(2) 慶應義塾史事典編集委員会編 二〇〇八・五八三頁「直営食堂」
- (50) 榎木真「慶應義塾大学医学部別館出土の陶磁器一括資料」『新宿区文化財調査年報6 平成21年度』二〇一四頁二〇一一年。この調査で出土した遺物は、新宿区文化観光産業部文化観光課にご協力いただき、令和五年(二〇二三)六月に未報告資料も含めて全点閲覧した。
- (51) 慶応大学病院食養課内食養学五〇年の歩み刊行会編『慶応大学医学部食養学五〇年の歩み』慶応大学病院食養課内食養学五〇年の歩み刊行会 一九七七年・二五五頁
- (52) 本資料群は未報告資料であり、前掲註(25) 沼崎 二〇〇一・一一八頁でわずかに触れられている。令和五年(二〇二三)二月に東京大学埋蔵文化財調査室にて出土資料全点の実見を行った。年代等の情報については堀内秀樹氏にご教示いただいたもので、実見当時における見解である。
- (53) 前掲註(25) 沼崎 二〇〇一・一一八頁
- (54) 本論執筆にあたっては、註に挙げた参考文献と以下に記す書籍・ウェブサイトにて食堂に関連する写真資料の有無の確認を行った。慶應義塾職員会編『塾監局小史』慶應義塾職員会 一九六〇年、『塾監局小史』Ⅱ編集委員会編『塾監局小史 Ⅱ』塾監局 一九八七年、塾監局小史編集委員会編『塾監局小史 Ⅲ』塾監局小史編集委員会 二〇一八年、慶應義塾創立一五〇年写真集編集委員会編『図説・慶應義塾百年小史【復刻版】』慶應義塾 二〇〇八年、慶應義塾創立一五〇年写真集編集委員会編『写真集 慶應義塾一五〇年』慶應義塾 二〇〇八年、阿久澤武史『キヤ

ンパスの戦争 慶應日吉 一九三四—一九四九』慶應義塾大学出版会 二〇二三年、三田評論ONLINE【写真に見る戦後の義塾】(最終確認日：二〇二四年一〇月三一日)、Keio Object Hub「慶應義塾史古写真コレクション」(最終確認日：二〇二四年一〇月三一日)